

11 青磁遊環龍文花瓶 初代宮川香山

一点

大正三年（一九一四）  
陶磁  
径四七・〇、高七七・一



水底に眠る龍の厳めしいすがたを浮彫で表した青磁花瓶。上下が開き、中央部でくびれている形から、立てて置いた鼓を思わせるため立鼓形と呼ばれる器形であるが、本作では中央部をひねり返して上下二つに分けられている。また、よく見られる立鼓形花瓶と異なる点として、遊環が付く鸚鵡のような顔の様式化された象耳も特徴の一つである。その他にも、古銅器から転用したものとみられる口縁部と下部の二段に重ねた雷文の緻密な装飾など、幾重にも技巧を凝らした作りとなっている。本作は大正三年（一九一四）三月から七月にかけて開催された東京大正博覧会の出品図録から、初代宮川香山により「青磁太平形晴天眠龍彫刻花瓶」の名称で出品された作品と酷似するものである。しかし、買上または献上の記録がまだ確認できず、出品作と同一作品であるかどうかは即断できない。大正十年九月二十四日、御渡欧から帰国された皇太子裕仁親王へ大正天皇・貞明皇后より贈られたものである。「晴天」は文字通り晴れ上がった空の色を指し、中国でもそのような色合いの青磁を「天青」と呼び習わしていた。彫塑的な加飾表現を得意とした香山らしい創意が随所にみられ、晩年にも制作意欲が衰えなかったことを示す大作である。底裏には「眞葛香山」の銘印が押される。

初代宮川香山（一八四二〜一九一六）は京焼の初代眞葛長造の子として生まれ、明治維新後、新開地として発展しつつあった横浜へ移住、眞葛窯を開窯した。自らの作品を眞葛焼（マクス・ウェア）と称し、海外輸出を盛んに行った。博覧会や展覧会を通じて国内での評価も高く、明治二十九年（一八九六）には帝室技芸員に任命された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生 — 作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 72

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzokan